

平成9年12月8日第3種郵便物認可  
平成30年9月30日発行（隔月発行）第138号

**HI**  
HAIKU INTERNATIONAL

2018  
No.138



俳句ユネスコ無形文化遺産  
登録推進協議会

## 「～有馬朗人会長と行く～スウェーデン俳句の旅2018」旅行記

黒川悦子

日本はスウェーデンと1868年に友好航海通商条約を締結し、外交関係を開始してから本年は150周年を迎えた。これを記念して文化交流の旅が有馬朗人会長を団長に、6月24日から6月30日まで実施された。

24日朝、成田空港を出発した一行25名は同日夕、ストックホルム空港に着いた。この日は夏至祭の翌日であり、その名残を探したが見当たらない。しかし、夏至祭で郊外へ出掛けていた車が続々と街へ戻る渋滞に出くわした。ストックホルムのホテルに到着すると、今回の旅の企画者スウェーデン俳句協会会長ラーシュ・ヴァリエ前駐日スウェーデン大使がお出迎えしてくださった。

日の長さは聞きしに勝るもので、午後10時過ぎに漸く街は暮色に包まれた。街へ繰り出して名物のミートボールを食べても、夜遊びという罪悪感が失せてしまう白夜である。

25日朝9時、ホテルを出発してウプサラへ向かう。日本へ大きな影響を与えた博物学者カール・フォン・リンネの館と庭園、航空事故死された記憶も新しい第2代国連事務総長ダグ・ハマショールド氏の墓地で献花、ウプサラ大学図書館、ウプサラ大聖堂などを終日訪問した。

26日朝9時、ホテルを出発して俳句シンポジウム会場の東洋博物館へ行く。山崎純在スウェーデン日本大使のご挨拶の後、「世界の俳句の今」をテーマにヴァリエ会長司会のもと有馬会長、ヘルマン・ファンロンパイ日本EU俳句交流大使でEU初代大統領、ウィリー・ヴァンデワラ教授（ベルギー俳句センター会長）、ヴァリエ会長それぞれの講演と討論が行われた。

有馬会長は次のようなことを講演された。古来欧米の詩歌はホメロスの「イリアス」や「オデュッセイ」のような長編を得意とし、中国や日本にはそのような長編はない、と詩歌の歴史を語られた。そして、世界に親しまれる俳句の特色として次の3つをあげられた。1、俳句は非常に短いこと。2、俳句の主なテーマは自然であること。3、俳句はだれでも句作を楽しむことができること。最後に、自然と共存する俳句は地球環境保全の一助になる、俳句を通して地球の平和を築いて行きましょう、と締めくくられた。

ファンロンパイ氏は、英国の詩人ジョン・キーツの言葉「美しきものは永

遠に喜びである（『エンディミオン』）を引用して、詩歌は人間における永遠的なものに通じている、また、俳句は詩歌の一部であると述べられた。そして、俳人は自然や季節を受動的に感受するが、俳句を詠むことによって能動的な存在となる。俳人は真善美の理想に向かって行動しているといえる。それ故に、俳句は行き過ぎた合理主義と利己主義に対して解毒剤となるであろう、と述べられた。

ヴァンデワラ氏は、当協会出版の『国際俳人句集』の序文にある俳句定義とアメリカ俳句協会の俳句定義とを比較検討しながら俳句形式の基準の必要性を説かれた。また、俳句と川柳の違いについて一茶を例に「真面目」対「おどけ」であると述べられた。

ヴァリエ氏は、西洋に於ける日本文学研究のパイオニアとして先ず、英国の外交官で日本学者のウィリアム・ジョージ・アストンを紹介され、次に小泉八雲の果たした功績について述べられた。また、最初の英語俳句の作者について野口米次郎の名をあげながら英語俳句の歴史を述べられた。

シンポジウム終了後、JAL財団の「世界こどもハイコンテスト」の世界大会スウェーデンの授賞式が行われた。うれしそうに賞状と賞品を手にする子供達の姿に会場は終始なごやかであった。また、授賞式前後には作家で映画監督のスザンヌ・エメリッヒ氏による俳句入りの映像が流されていた。

その後、眺めが良いレストランと評判の現代美術館で昼食をすまし、再び東洋博物館にて句会コーディネーター西村和子氏による句会が行われた。いくつかその折の俳句を紹介する。

悪戯の過ぎし神あり夏炬焚く	有馬朗人
夕焼けに入り江の染まる水都かな	ヘルマン・ファンロンパイ
夏至過ぎてをちこち走る帆掛舟	ウィリー・ヴァンデワラ
乞食も黒歌鳥にしづかなり	ラーシュ・ヴァリエ
湾深く白夜の月を宿したり	西村和子

句会終了後、ヴァーサ号博物館を見学した。

27日朝9時、ホテルをバスで出発して約1時間、ヴァイキング時代の中心地ヴァレンツナを訪問した。最初に訪れたのは麦畑に囲まれた小高い丘の上に12世紀に建てられたというマルキム教会である。教会に入ると民族衣装を纏った女性がほのかに甘い香りのするエルダーフラワーのお茶を振舞ってくださった。そして、礼拝堂でスウェーデンの音楽鑑賞をした。コントラバスやリュートの演奏しながら俳句を朗詠する姿は吟遊詩人を思わせた。教会か

ら次の訪問先ハスビ博物館まで、有馬会長は満面の笑顔で美人ヴァレンツナ市長と二人で馬車に乗って行かれた。

午後はヴァレンツナの文化センターにて「俳句とは何か」をテーマに昨日と同じ司会者・パネリストでシンポジウムが行われた。言葉の違いをどのようにして俳句の普及へつなげるか、或は、季節の違いはどうするか（例えば北半球の12月の雨は冷たいが、南半球の12月の雨は熱い）等が討論された。

28日は、ストックホルム市庁舎や市立図書館、ノーベル博物館や旧市街ガムラスタンなどを終日観光した。特筆すべきは、ドロットニングホルム宮廷劇場の見学である。ヴァリエ会長の計らいで通常は見学できない所まで18世紀の衣装を来た方にご案内して頂くと、宮廷時代へタイムスリップしたようであった。夕食はガムラスタンのレストランでスウェーデン最後の夜を楽しんだ。

29日朝、帰国の途についた。今回の俳句交流の旅でつくづく実感したことは、国は違えども俳句という共通の詩心が人の輪を広げ、なお且つ、相手の立場を尊重する気持ちが強くなったことである。



6月26日 於、東洋博物館



— HI Club — ①

WEST, Bill (U.S.A.)

●  
The cave in the ice,  
A frozen haven of cold...  
A welcome blackhole...

RODNING, Charles Bernard (U.S.A.)

●  
cold moon  
turning windmill shadows  
on frozen fields

ROSS, Bruce (U.S.A.)

●  
frog pond  
only the youngest one  
on a lotus leaf

PARTRIDGE, Brent Alan (U.S.A.)

●  
river curves  
around the straight line  
from the moonrise

KURODA, Motoko (U.S.A.)

●  
my husband loved to put his head  
on my laps but now  
he is under cold soil

RUDYCHEV, Natalia, L. (U.S.A.)

●  
a smile  
crossing a bridge  
under the double rainbow

— HI 選集 — ①

ウエスト, ビル (アメリカ)

●  
氷洞窟  
凍てた避難所  
ようこそブラックホール

ロドニング, チャールス ベルナルド (アメリカ)

●  
冷たい月  
風車の影まわし  
凍てし原

ロス, ブルース (アメリカ)

●  
蛙池  
若き蛙だけ  
蓮の葉に

パートリッジ, ブレント アラン (アメリカ)

●  
川曲がり  
真っすぐなあたり  
月昇る

黒田素子 (アメリカ)

●  
膝枕  
愛せし夫  
冷土下に

(自訳)

ルデイチェフ, ナタリア, L (アメリカ)

●  
微笑み  
橋渡る  
二重虹の下

HIBARI (U.S.A.)

●  
I click the remote  
to sit in silence with my wife  
firefly evening

ヒバリ (アメリカ)

●  
テレビ消し  
妻と静かに座す  
蛍の夕

HRYCIUK, Marshall John Louis (CANADA)

●  
butterfly garden  
here's a dragonfly  
landing on me

リチューク, マーシャル ジョン ルイス (カナダ)

●  
蝶の園  
蜻蛉が  
私にとまる

HANSEN, Hanne (DENMARK)

●  
flying kites  
the sakura festival  
heralds spring

ハンセン, アナ (デンマーク)

●  
凧あげて  
桜まつり  
春告げる

SHIMANE, Marie Annette (JAPAN)

●  
an autumn walk  
stirrings once so clearly heard  
now echo in old bones

シマネ, マリエ アネッテ (日本)

●  
秋の散歩  
心の声ははっきりと  
今老体にこだます

CAMPIOLI, Marco (ITALY)

●  
waves of colours  
making the flowers scented –  
clouds of blossoms

カンピオリ, マルコ (イタリア)

●  
波の色  
花を香らせ  
花の雲

(ジャンポール, リチャード, 絹子訳)

BRAVO, Ángel (SPAIN)

●  
Triste atardecer  
Luz en las ventanas  
Con poinsettia

ブラーボ, アンヘル (スペイン)

●  
窓暮れて  
ポインセチアの  
花明かり

(自訳)

STOPAR, Rudi (SLOVENIA)

●  
Fresco on the wall  
A lizard in the shadow  
of asparagus

ストパール, ルデイ (スロベニア)

●  
壁にフレスコ画  
アスパラガスの  
影にトカゲ

—— HI 選集 —— ②

大高霧海（東京）

●

平成の最後の立夏日の眩し

—— HI Club —— ②

OTAKA Mukai

●

The first day of summer  
Heisei ends  
blinding sunlight

和田 仁（秋田）

●

初蝶の呪文のやうに舞ひ上がる

WADA Jin

●

The first butterfly  
like a charm  
flying high up

山元志津香（神奈川）

●

亀と鯉何かもの云ふ梅遅し

YAMAMOTO Shizuka

●

A turtle and a carp  
discussing something  
late plum blossoms

田中由子（神戸）

●

揚雲雀声降らしつつ紛れたり

TANAKA Yoshiko

●

Lucky to be hearing  
the skylark's song  
disappeared

染川清美（大阪）

●

戦火果つ沖繩桜は朱色かな

SOMEKAWA Kiyomi

●

Having end of the war time  
Japanese cherry in Okinawa  
a vermilion color

草刈幸風（東京）

●

乾杯や桜の幹に捧ぐ盃

KUSAKARI Kofu

●

A toast !  
offering a sake cup to  
the trunk of a cherry tree

岡本 清 (札幌)

●

通り抜ける家の狭間の山法師

OKAMOTO Kiyoshi

●

Passing through the narrow path  
between the houses  
a dogwood –

境 幹生 (東京)

●

岸辺まで紅葉引寄せ錦川

SAKAI Mikio

●

Autumn tints  
spreading to the banks  
the *Nishiki* river

加瀬谷敏子 (秋田)

●

観音の眼差に触れ村の梅

KASEYA Toshiko

●

Touched  
by the *Kannon's* gaze  
the village plum blossoms

古郡孝之 (さいたま)

●

身ざれいは母の口癖更衣

FURUKORI Takayuki

●

Always neatly dressed  
my mother's habit  
seasonal clothing changes

根津静江 (北海道)

●

夕映や壕流れ行く花筏

NEZU Shizue

●

The evening glow  
floating in the moat  
a floral raft

宮本壮太郎 (島根)

●

清明の光を浴びて天守閣

MIYAMOTO Sotaro

●

Bathe in the bright light  
of the sun  
the castle tower



渡辺通子（日立）

●

颯爽と現はれ被災地に燕

WATANABE Michiko

●

Swallows  
making a dashing appearance  
at the disaster-stricken area

塚月凡太（和歌山）

●

地下鉄の車庫は地上に新樹光

TSUKAZUKI Bonta

●

The subway tram shed  
above ground  
bright fresh greenery

神山姫余（広島）

●

白髪の母の少女よ桜雨

KAMIYAMA Himeyo

●

A photo of my white-haired mother  
as a young girl  
cherry blossoms in the rain

宮田祥子（愛知）

●

沈丁香窓開け放つ理髪店

MIYATA Shoko

●

A sweet-smelling daphne  
windows wide open  
of the barber shop

今泉かの子（名古屋）

●

バス停に残る村の名さくら咲く

IMAIZUMI Kanoko

●

A bus stop  
retaining the name of the village  
cherry blossoms

船矢深雪（函館）

●

北欧の本屋の棚に桜かな

FUNAYA Miyuki

●

On a shelf of a book store  
in Northern Europe  
cherry blossoms —

原田静子（埼玉）

●

サイドミラー閉じてこぼるる花の塵

HARADA Shizuko

●

Closing the side mirrors  
falling  
cherry blossom petals

和田とし子（東京）

●

春愁や手をすべりたる絹の服

WADA Toshiko

●

Spring melancholy –  
sliding from my hands  
a silk dress

川口比呂人（神奈川）

●

紫陽花に花を促す渋り雨

KAWAGUCHI Hiroto

●

Urging the hydrangeas  
to bloom  
in the reluctant rain

大慈弥爽子（習志野）

●

赴任地へ踏み出す一步初桜

OJIMI Soko

●

Taking the first step  
to my new position  
the first cherry blossoms

福田ひさし（埼玉）

●

白薔薇の薔薇園となる月の下

FUKUDA Hisashi

●

Under the moon  
white roses make  
a true rose garden

小畑晴子（大阪）

●

屑籠は歌反古ばかり梅雨ごもり

OBATA Haruko

●

A waste basket  
filled with discarded poems  
cooped up in the rainy season

高坂りゅう子（北海道）

●  
かさこそと狭庭日だまり春めきぬ

TAKASAKA Ryuko

●  
Small crackling noise  
At a sunny spot in my bit of garden  
Bring us a touch of spring

ヘンリー足軽（東京）

●  
水しぶきかのもこのもに虹を立て

HENRY Ashigaru

●  
Des arc-en-ciels  
sont apparus çà et là  
sur des embruns

小上栄女（和歌山）

●  
羅の女性が幹事同窓会

OGAMI Shigejo

●  
In her summer Kimono  
the lady in charge of  
reunion party

江口靖子（埼玉）

●  
掃き寄する薔薇の花びら風に散る

EGUCHI Yasuko

●  
The wind scatters  
rose petals swept into a pile  
all around

久永小千世（知立）

●  
参州路一日にして早苗田に

HISANAGA Sachiyo

●  
Mikawa plain changes  
into greenfields of rice sprouts  
in one day

三宮麻由子（東京）

●  
黒南風や夜明けの池の生臭し

SANNOMIYA Mayuko

●  
May's South wind,  
the pond delivering a smell  
morning breaks

望月よし生（北海道）

●

古稀傘寿越えても今が春と言ほ

MOCHIZUKI Yoshiwo

●

Au-delà des soixante-dix ans  
ou quatre-vingt ans  
je serais toujours au printemps

静 湖（北海道）

●

せせらぎや室生の里に遅桜

Seiko

●

The murmur of a stream  
at the country of muroo  
Late-blooming cherry trees

山田由紀子（広島）

●

定休日花の塵舞ふ駐車場

YAMADA Yukiko

●

shop holiday  
flowing through the parking lot —  
cherry petals

高見和明（東京）

●

春霞山の木々にも動きあり

TAKAMI Kazuaki

●

Spring haze  
trees in mountain  
are moving

中村和江（深谷）

●

春の昼稚児列町を明るくす

NAKAMURA Kazue

●

children lined in festival costume  
brighten the street  
in spring daytime

山本浪子（川崎）

●

河童忌や海<sup>かい</sup>彼の本の塵<sup>ちり</sup>払ふ

YAMAMOTO Namiko

●

dusting foreign books  
the anniversary of  
Ryunosuke's death

ルーマニアのHAIKU管見

西池冬扇

2018年6月にルーマニア国に3週間滞在して、現地のHAIKUに接する機会がありましたので、その時の見聞をご報告します。

ルーマニアは文化的土壌が非常に豊かであり、音楽、演劇（今回滞在中に第25回シビウ国際演劇祭があり、野田秀樹氏が「ウォーク・オブ・フェイム」を受賞するなど、日本の演劇の活躍も目覚ましい）には優れたものがあります。学校、家庭などで子供たちが詩の朗読をする光景もよくみられることです。

特にミハイ・エミネスクは国民的大詩人として方々に肖像画をみうけられ、また最高額紙幣（500レイ）にも彼の肖像が使われております。無形文化遺産になっている民謡ドイナや口承叙事詩バラダは日本でも知られているところではあります。

HAIKUは想像以上に拡がりをみせており、Haijinという名称でかなり多くの愛好者がいます。元駐日大使のラドウ・シェルバン氏や宇宙飛行士若田さんとの宇宙連詩で評判になったクレリア・イフリムさんなどが日本でもよく知られています。ルーマニアには1989年の体制転換直後に二つの俳句組織が生まれております。1990年結成の「ルーマニア俳句協会（Societatea Romana de Haiku）」と1993年結成の「コンスタンツァ俳句協会（Societatea de Haiku din Constanta）」です。今回は、このコンスタンツァ俳句協会にて「俳句とHAIKU」という講演をしてまいりました。聴衆は非常に熱心で質疑応答に随分と時間をとりました。

ブカレスト大学の日本語学科で俳句のセミナーを開く機会もいただきました。日本語学科は学生数が200人ほどですが、国内全体では2000人ほどの日本語を学習する人がいるようです。セミナー句会に参加したのは18人、当日は学期試験中でもありましたので研究熱心な学生たちが参加したようです。日本語の句会も開きました。なかなか俳句に詳しい学生もいて、楽しい質疑になりました。詩人のイフリムさんが授業参観に来て下さったのには感激しました。帰国前日にはシェルバン氏が送別会を開いてくださり、意見を交換できたのも大きな収穫でした。氏とは句を定期的に交換します。